

河野 あゆみ

School of Medicine, UCLA 客員研究員

在宅虚弱高齢者に対する予防訪問ケアプログラム実施のための

スクリーニング表の開発と検討：一人暮らし高齢者に焦点をあてて

本研究の目的は、一人暮らし高齢者に焦点をあてて、介護予防のための予防訪問ケアプログラムを実施するためのスクリーニング票の開発と検討を行うことである。M町の単独世帯高齢者1145人のうち、介護認定を受けていない高齢者677人に郵送調査を実施した。調査内容は、身体的特性には運動機能、健康状態、尿失禁、栄養状態、多重内服、口腔機能、痛み、心理社会的特性には認知機能、抑うつ、閉じこもり、手段的ADL、危機管理能力、手段的ソーシャルサポートから構成される計32項目である。分析対象は、宛先不明者や入院していた者、実際には家族と同居していたり、介護認定を受けていた高齢者を除いた389人である。その結果、対象の約80%は女性であり、90%近い高齢者は15分くらい続けて、歩くことができ、ほとんどの者が日用品の買い物や金銭管理などが自立していた。総合的移動能力によって、各項目の分布状況を検討した結果、隣近所や家庭内は不自由なく外出できるが、交通機関を使っての外出は困難な者は、交通機関を使って自由に外出できる者に比べて、運動機能、健康状態、尿失禁、栄養状態、痛み、認知機能、抑うつ、閉じこもり状態などの状況が有意に悪かった。しかし、危機管理能力や手段的ソーシャルサポートは、総合的移動能力による違いはみられなかった。これらより、身体的機能と関連する項目では、交通機関を使っての外出ができるか否かは虚弱性のindicatorになり得ると考えられた。しかし、危機管理能力や手段的ソーシャルサポートなど社会的虚弱性を検討する際には、総合的移動能力を考慮に入れないほうが望ましいと考えられた。